

水中花

染谷 秀雄

緊急事態宣言で仕事休みのときに台所の出窓の棚を拭いて整理しようとしたら透明の冷水を入れるガラス容器が目にとまった。長い方は一リットル、短い方は二百ミリリットルの容器だ。それぞれに水中花を入れてある。かれこれ十年ほど前になるだろうか、堀切菖蒲園に吟行した際、帰りの道すがらみやげ店で目にとまり購入したものだ。下町の面影そのものの道には小さな商店がつづく。どうせすぐにダメになるものだが季語ではあるし、いろいろな種類も揃っている。なつかしさも手伝い、大きい丈のものと小さい丈のものを買ってみることにした。子どもの頃の水中花は小さく畳まれたものが鉛の重さで底に着くとさつと広がりそれはそれはおもしろいものだった。長さもコップに入れて丁度の大きさであった。このとき買ったものもどうせ十日もすれば萎えてダメになるものと思っていたがどうしてどうして、なかなか持つではないか。寿命が長いのである。そのとき知ったがそれもその筈、紙ではなく今のは化学繊維でできているようだ。したがって菖蒲のような長い形のものも加工することもできるのだ。世の中変わったものだと思った。この水中花も蓋さえあれば埃も入らず濁らないため水を替える必要もないくらい持つ。水を替えた水中花は外側との温度差で曇ってきた。長く持つのはそれはそれでいいが、一度買った人はつぎになかなか買ってくれないのではないかとちょっと心配になった次第である。